STONES

BAND SCORE THE BEST OF



Tell Me
Route 66
Carol
Paint It, Black
(I Can't Get No) Satisfaction
Get Off Of My Cloud
Street Fighting Man
Jumpin' Jack Flash
Honky Tonk Women

Gimmie Shelter
Let It Bleed
Sympathy For The Devil (Live)
Brown Sugar
Tumbling Dice
Angie
Let's Spend The Night Together (Live)
Time Is On My Side (Live)
Harlem Shuffle

SHINKO MUSIC PUB.CD.,LTD.

THE BEST OF THE ROLLING STONES

CONTENTS

Front Cover Photo: CALVERO/ORION PRESS

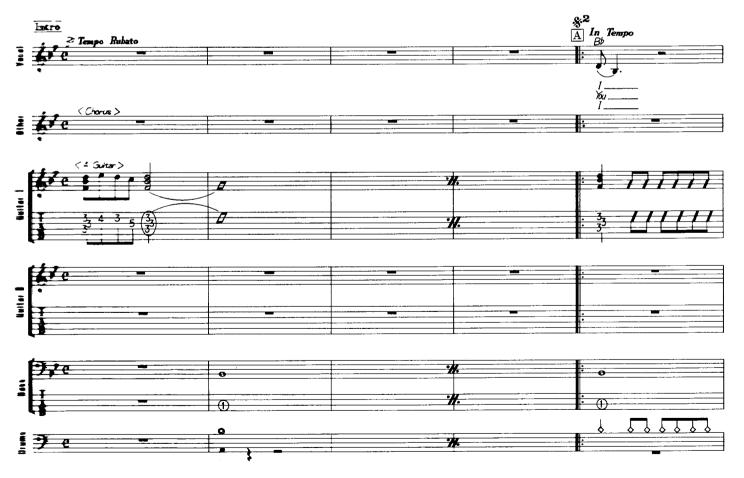


TELL ME (YOU'RE COMING BACK)

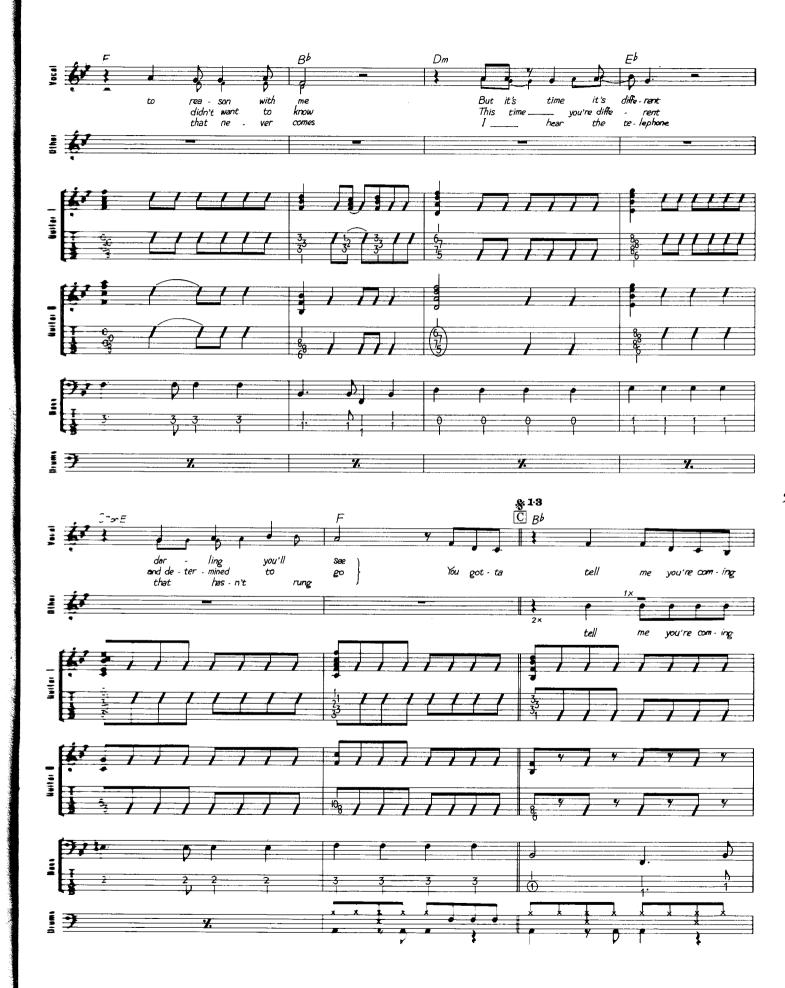
Words & Music by Mick Jagger & Keith Richard

コはTempo Rubato (テンポ・ルバート)、つまり自 ニュニンポで、と指示があるが、ベースとドラムはタイミングを ョニュるこめに一定のリズムをキープするようにした方が良いだ きた。三つ部分からは、ボーカルをキッカケにしてリズムをスタ - ~ きせればよい。Guitar I はアコースティック・ギターを使 ここ、 るものだ。イントロはアルペジオ風のフレーズを弾いてい ミゴ その他の部分はコード・ストロークを行っている。このコ - 1年え方も楽なものでよいだろう。 🖾の部分のドラムは、シン 、さけを使って静かにプレイしている。ここはあまりうるさく

ならないように注意したい。固からは、エレクトリック・ギター のGuitar IIもスタートレ、ドラムも普通の8ピート・パターン を叩いているが、この曲ではスネア・ドラムを使わず、代わりこ タンバリンを打っている。Guitar IIのエレクトリック・ギター のサウンドは、ディストーションさせないクリアーなものだ。レ ア側のピックアップを使って、高音を強調したサウンドで弾くと 良いだろう。回の部分ではギター・ソロを弾いている。ここでは アルペジオ奏法によるフレーズを弾いているので、左手のフィン ガリングは、コードを押えたままでよいだろう。



















N-1-00

Words & Music by Bob Troup

ボビー・ヘフループという人の作品で、'40年代に作られたものを、ストーンズがリメイクしてデビュー・アルバムなどに収録しているヴァージョンだ。曲の構成が普通の12小節のブルース・パターンとは違い、12+12の計24小節がワン・コーラスになっていて、さらにストーンズの場合、まずその後半の12小節から入るというアレンジにしている点が、ちょっとユニークだ。プレイの方はストーンズらしくシンプル&ストレートなもので、テクニック的に難しい点はまずないと言える。ただ、少し問題なのはベース・ラインで、普通のプレイヤーならあまり選びそうにないラインだけに、多少慣れるまでに時間が必要かもしれない。逆に言えばそれだけ個性的なベース・ラインということだろう。1・2弦を多

用するので、その音があまり細くなってしまわないようにサウンドをセットするといい。リード・ギターはその大部分がAのマイナー・ペンタトニック・スケールのポジションで(Aのマイナー・ペンタトニックそのものを使っているわけではない)プレイされていて、コピーはかなり簡単なはずだ。ギター・ソロ巨の5小節目以降では1・2弦での複音プレイがスライド絡みで出て来て、これが唯一のポジション・チェンジだろう。これも特別難しいプレイではないので、余裕を持って弾けるように練習しておきたい。そうしておけばフレーズの「勢い」が違って来るはずだ。



© 1946 by Burke & Van Heusen, Inc. / Edwin H.Morris & Co., Ltd.

All rights reserved Used by permission

Rights for Japan administered by WARNER / CHAPPELL MUSIC, JAPAN K.K., c/o NICHION, INC.





II



E. Guitar

Tab

E. Bass 9:4

Α7



2

Well it winds_

A₇

We//

ît









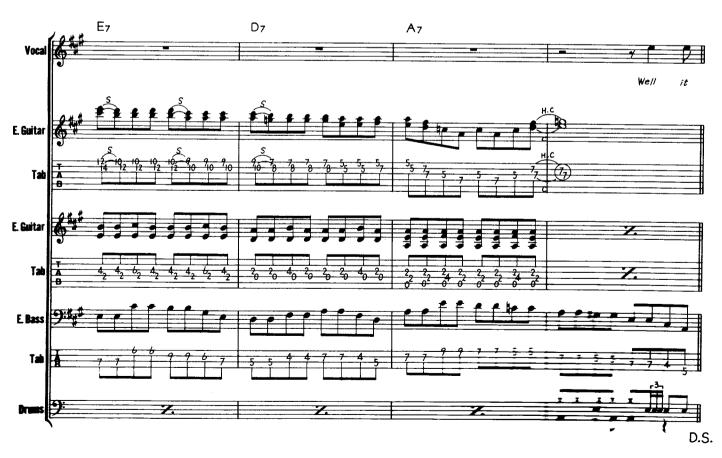






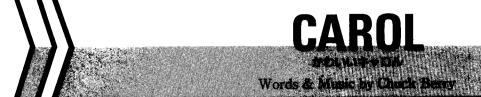








.S.



ロックン・ロールの父とも呼ばれる偉大なアーティスト、チャック・ベリーの作品で、ここでは彼らのデビュー・アルバム「ザ・ローリング・ストーンズ」に収められているヴァージョンをピック・アップしてみた。レコードのオリジナル・キーは譜面通りAなのか、それともBbなのかちょっと微妙なのだが、とりあえずより一般的に使われるAキーにしておいた。もしBbキーでプレイする場合、リズム・ギターのポジショニングは単に1フレット上げではなく、大幅に変更する必要がある。リード・ギターとベースは単純に1フレット・アップでOKだ。レコードの演奏自体、当時の水準から考えてもあまり上手なプレイではなく、かなりラフ

なもので、特にベースなど音がはつきりしない(録音のせいではなく、技術的な原因)部分も多いのだが、大切なのはそうした細かい面ではなく、全体としてのノリ、フィーリングだろう。そうしたポイントをふまえてコピーを進めて行ってほしい。その反面、リード・ギターのフレージングなどは大部分がワン・ポジションで弾ける簡単なもので、初心者の練習にはちょうどいいし、それでいてロックン・ロールのフィーリングを充分に学びとることができるお手本にもなるはずだ。演奏がシンプルな分、リラックスしていい雰囲気を出せるように心掛けてみよう。テンポは意外に速いので要注意だ。





t

畑 う 面、

ンれがスこ

Ì



























Α7



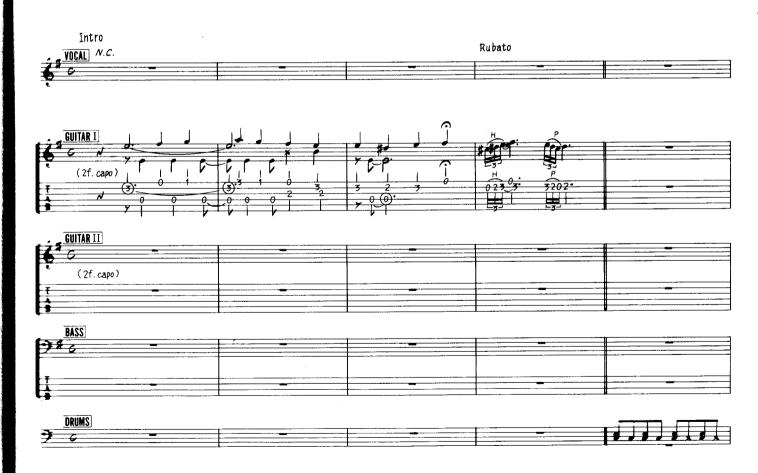




PAINT IT BLACK

it by Mick lagger & Sile 1991

ビートルズとの違いが如実に現れていた代表曲がこの曲であっ **こと思われる。この暗さ、退廃的な歌詩、黒人らしいフィーリン** ブなど、そのすべてが当時のロック・ミュージシャンに大受けだ った。今聴き直してみてもシンプルな曲作りは好感が持てる。こ ○曲にはB、Dといういわゆるサビガー応あるが、あくまでもA トロの4小節パターンで最後まで押し通すところが素晴らしい。 」かもボーカルとギターのユニゾンである。それだけにギターも 存在感の高い音が必要となってくるわけだ。ここではエレキ・シ ニールのサウンドだが、現在では、ギターシンセ、あるいは最新 ○システムであるシンセサイザーと接続できるギターが開発され ているので、わりと楽に音を作ることができると思う。巨からは ニターⅡが1拍3連を多用したバッキングに移るので、まるでフ ラメンコを見ながら盛り上がるような気分にさせてくれる。この カッティングも重要だね。ベースは面白いパターンが使われてい る。囚の1~4小節をみてほしい。Bの音を基調とした4小節パ ターンになっている。ルート弾き専門のベーシストにはちょっと 浮かばないようなフレーズだね。これがこの曲の躍動感につなが っていると思うね。ドラムスは下メロの部分は4分の頭を強調し たパターン。サビでは2拍、4拍のスネアの部分をハイハット・ オープンにして、強調している。いずれもパンチのきいたリズム に仕上っている。平担なリズムしか出せない人はこの辺のスタイ ルを学んでほしい。それと、この曲の注意点としては絶対もたら ないこと。それと細かい部分での技として、国の5~8小節目の ボーカルのシンコペーションはスピード感を出すのに一役買って いるね。













0₂ 22 0





dee - per

could not

this thing



sun_

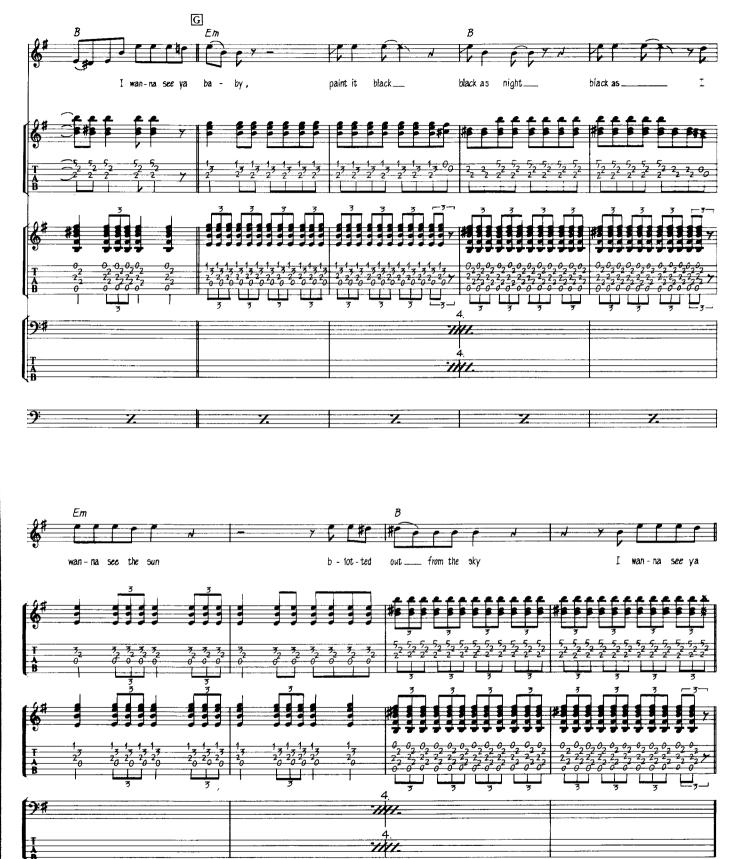
1 3 20

1 7









111

4. ///

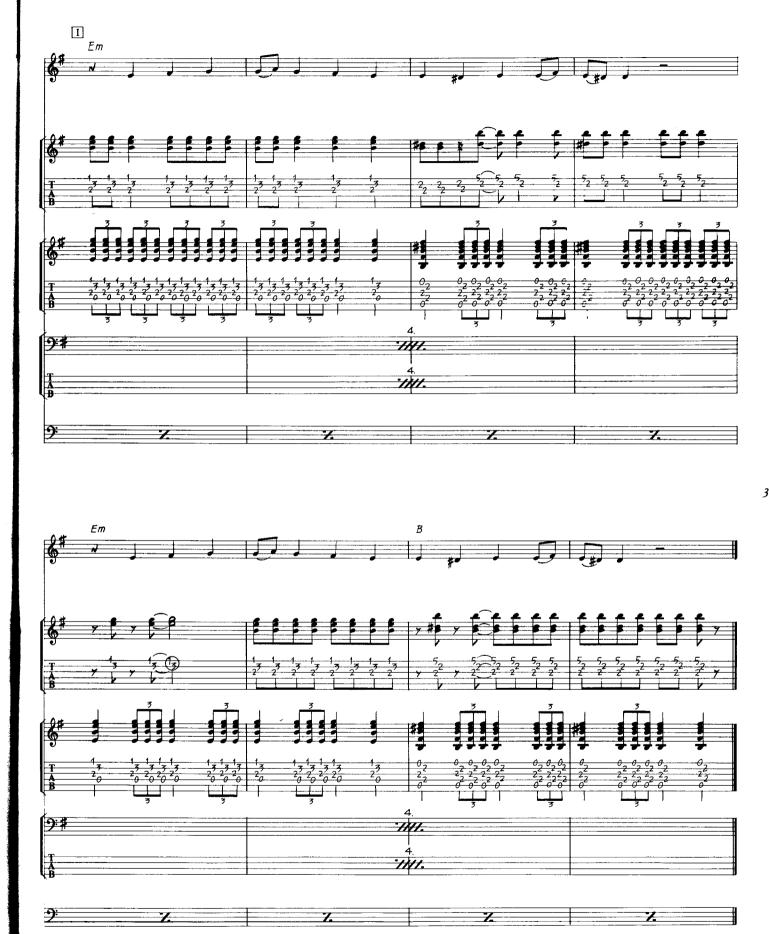
52 2



H



paint___ it



2

Fade Out

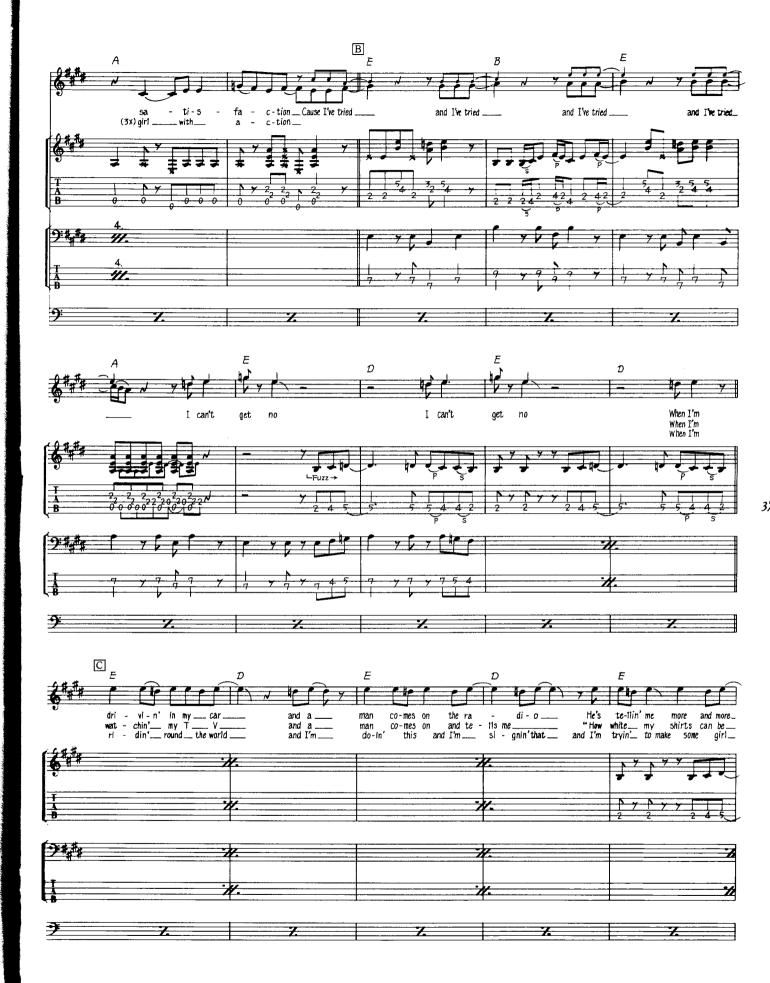
(I CAN'T GET NO) SATISFACTION

Words & Music by Mick Janger & Keith Richard

あそうくこの曲はリフから作っていったのではないかと思われるまど、知象的なリフの曲。このリフはサビ(区)のパターンのバッキングとなっているが、同時にイントロにもなっている。ギターのフレーズとして注目されがちであるが、実はこれ、ベースとギターのハーモニーを足してはじめてリフになるのである。この4度のハーモニーはやはり日本人では考えつかないもの。ギターのトーンは当時のファズ・トーンというもの。現在のディストーションのアタックの音を少しけずってやれば感じが出ると思う。

あとヒマな人がいれば、3、4拍目にタタタンとはいるタンバリンを入れてくれるとありがたいね。囚からのギターはリバーブを深めにかけたギター。これで囚旧と回の違いがはっきり出るわけ。リズム隊は、ベースがギターのリフとともに歩めば、ドラムスはタイトにきざむ。どちらかといえば前のめりにリズムを出した方がいいね。当時では珍しくバス・ドラム4拍リズムだからね。リズムの裏はベースにまかせて、4拍の表のリズムを表現することに力を入れよう。





₹ ナ。

ţ







•

GET OFF OF MY CLOUD

一人ほっちの世界

Words & Music by Mick Jagger & Keith Richard

ジャマー& Jチャードのコンポーザー・コンピは、詩、メロディと言語、あるいはそれより早く、リフやバッキング・パターンを考えていたようだ。曲の構成も、ビートルズのように3部形式としないで、自然にノリだけで押し切れるシンプルな2部形式を 信意としている。この曲もE/A、B/Aという2小節コード・ダーンを中心として曲を作っている。こういう方法での曲作りというのは日本の音楽界、特にボーカル・インストゥルメント部門ではなかなかないので、この譜面集から大いに学んでほしい。さてそんなわけで、この曲はすべての楽器に関して小じんまりと

せずに荒さを残した演奏を基本としよう。特にドラムスはワイルドにいこう。 国のドラムスは、3小節目のスネアの位置を見ると、はつきり言ってシェイクに近いものだが、それでOK。フィル・インも FTT 「「の2拍フレーズでごり押しする。この国のパターンと逆に国のサビ部分は4分を強調してもたり気味に叩く。ここはボーカルがメチャクチャ突っ込んでいるからね。この辺のフォローの仕方はライブを長く続けていないとなかなか出せないが、できるだけストーンズに迫ろう。









Repeat & Fade Out

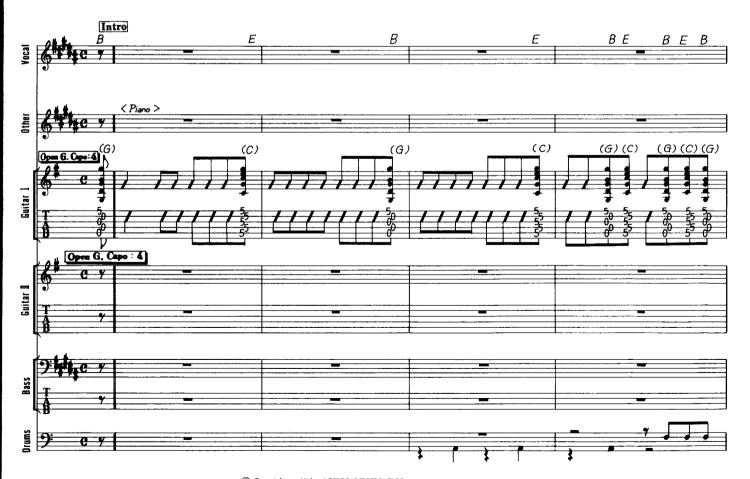
STREET FIGHTING MAN

ストリート・フォイティング・マン

Weete & Misse be Mick labors & Ke

この曲で使われているギターは、2本とも、オープンGチューニングになっており、カポタストが4フレットにつけられているものだ。オープンGチューニングは、キース・リチャードが得意としているものだ。1弦からD、B、G、D、G、Dに合わせるのだが、キースは6弦をはずして5弦のギターとして使っている。ギターの譜面は、カポをはずした状態に移調されているので、Gのキーになっている。これにカポを4フレットにつけると、ボーカルと同じBのキーになるわけだ。少し複雑だが、タブ譜を参考にして間違えないようにしてもらいたい。ギターのサウンドは、クリアーなものだが、図の部分でソロを弾いているGuitar II

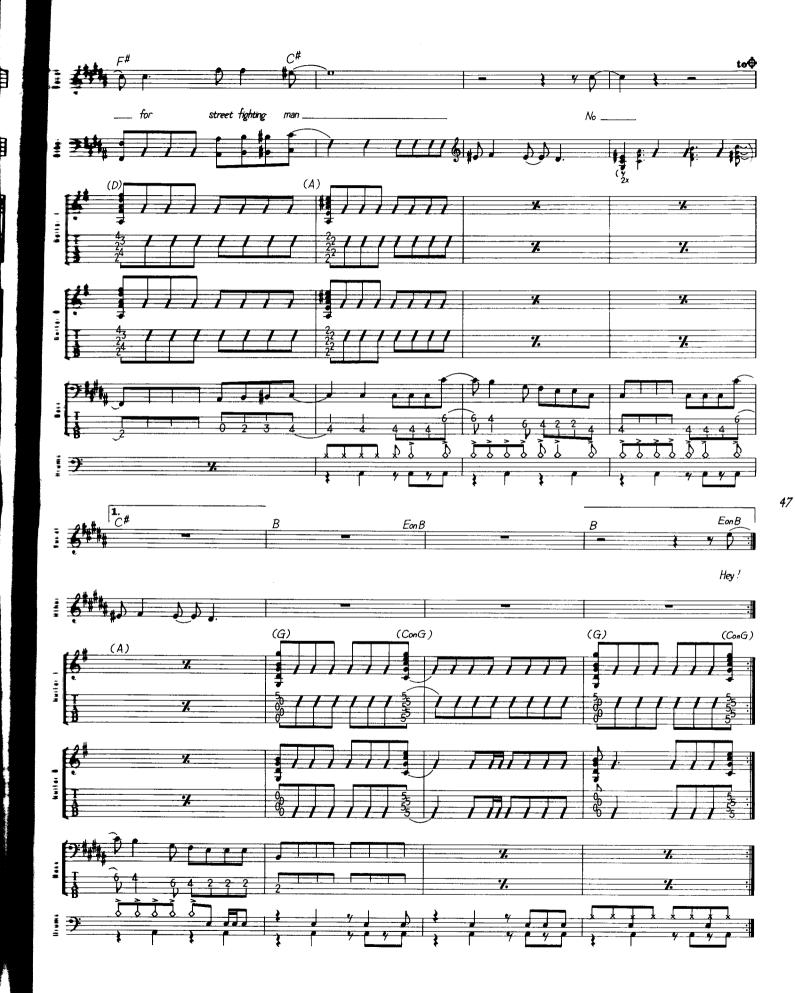
は、かなりひずんだサウンドこおって、る。これはファズなどのエフェクターをかけたものぎず、サリフスのサウンドのようにも聴こえる。フレーズもシンプリおものおうで、シンセなどで代用してもよいだろう。ペースは、シンプリことピートのラインをプレイしているが、国の部分では、宣言とこ言言のフレーズが違っているので注意してもらいたい。この芸ではこの他、国の部分でシタールのサウンドが入れられて、る。建立では省略させてもらったが、単純にBの音を弾いているものであり、シンセなどで工夫してみても面白いだろう。























JUMPIN' JACK FLASH

ジャンピン・ジャック・フラッシュ

Words & Music by Mick Jagger & Keith Richard

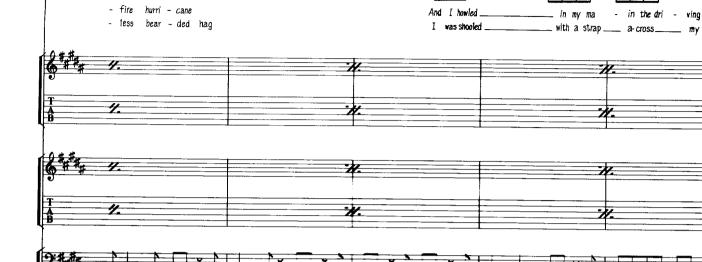
ストーンズ独特の憂いのあるこの曲は、中期の最高傑作といわれる。メジャーの曲なのに、なぜかあまり明るく聴こえないという変わった雰囲気の曲。ストーンズ自身もライブ・アルバムでは、もっとストレートに演奏している。その違いはアコースティックピアノ、オルガンの導入といった使用楽器の違いという大きな問題もあるが、この譜面上でいえば、囚メ口のところがBのペダル・ベースとなっている事である。実際ストーンズのライブや、諸君が遊びでこの曲をプレイする事があると、必ずベースもギター・リフと同じ事をやりたくなるが、ここではそれはやらない。この事実は、前述のある種の憂いを出すための大きな理由となっている。全員でリフをプレイすると、どうしてもその色が強くなってしまうからね。回のギターIは珍しくハイ・ノートでプレイし

ているが、パターンを作り、かつ裏メロとしての存在もアピールしている。この細い音は、リア・ピックアップを使用し、トーンもフルにしている音。この音が巨の5小節目からも出てくる。以上の2つのギターは、オプリガートの少ないこの曲においては重要な部分だ。イントロ、©、巨はベースの2小節パターンガメイン・フレーズ。これも「日メロでのペダル・ベースがあってこその動きのあるフレーズといえる。「回の部分、つまり3番は、1番、2番と歌の長さが倍になっているので注意。これはよく間違えやすいんだよね。譜面の制約のないバンドらしいアレンジだ。プレイ上の難しいことは全くないので、いかにしてこのストーンズらしきを出すかが、練習の目標となるだろう。









And I howled

- in the dri - ving

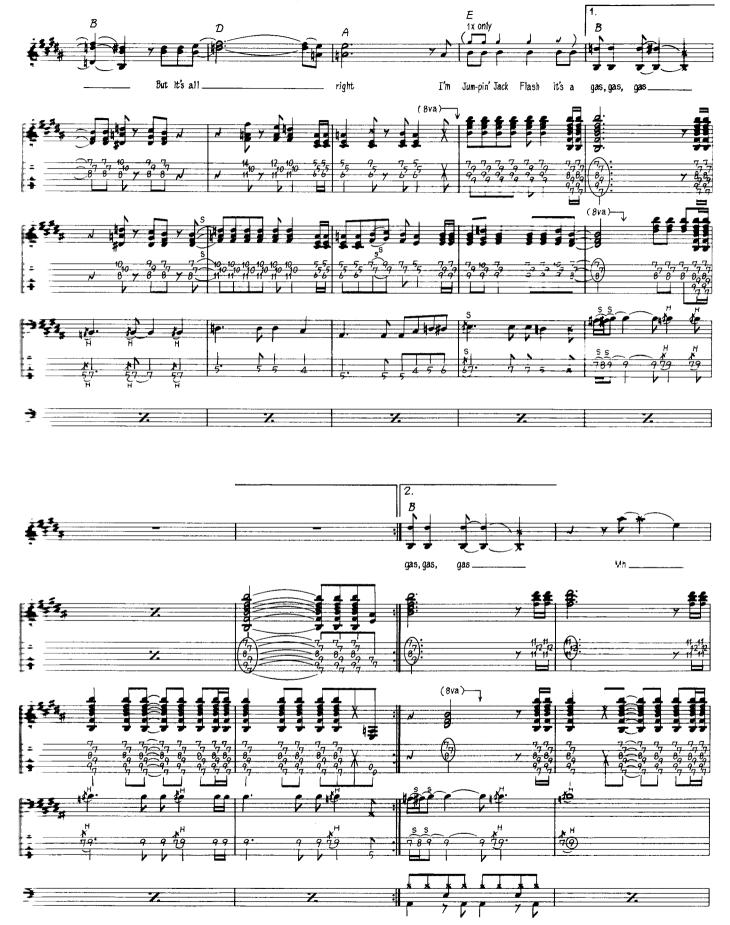
rain_

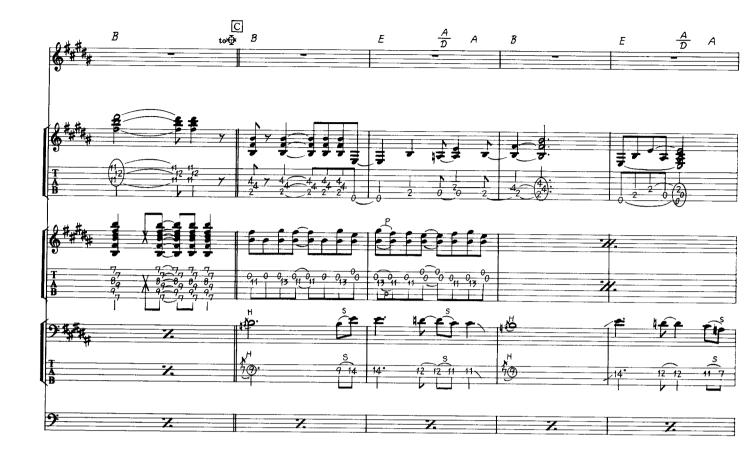
back

_ in my ma



















HONKY TONK WOMEN

は手事ととかりイメン

W-Mick Jagger & Keith Richard

はつきりいって、この曲ができなければ、ロック・バンドとしては認められないほどポピュラーな曲。この曲もギター2本がうまくからみあって出来ている曲。キースは、6弦を取っ払った5弦ギターのオープンGチューニング(1弦からDBGDG)。この曲からストーンズに参加したミック・テイラーはレギュラー・チューニングで、さすがにブルース的フィーリングを出している。まずギターIは、とにかくイントロのリフがキメ手。これがきまんなきゃ、曲が始まらないよ。区の前2小節のフィル・インもつっかえないようにバッチリキメてくれ。あとは、譜面を参考にして、間の取り方(休符)を意識してくれればいい。要するにキースのバッキング・パターンを身につけてしまえば、もう楽勝だ。レコードをすりきれるぐらいよく聴いてくれ。ミックのギターはこれまた対照的なサウンドで、ナチュラルなトーンでせまっている。フェンダー系ではちよっと出せない深みのある甘い音だね、

あそらくレスポールだと思う。まず重要なところは®の前のフィル・イン。これもうまくきめないとサビには入れないからね。あとはやはりブルース・ギタリストらしく、ブルーノートを多用したフレーズが多い。ギタリストとしてはブルースは必須科目だから彼のプレイは要研究だ。©のソロは、その好例だ。普通、ペンタトニックとブルーノート・スケールとは余り混ぜてフレーズ作りをしないものだが、このソロ(大半はメジャー・ペンタトニック・スケールだ)には、4・5小節目にブルースが含められていて興味深い。ドラムス、ベースはとにかくすき間を大事にしよう。音数よりも、休符。サウンドにメリハリを付ける意味でプレイしよう。1番、2番のベースのない部分など非常に効果的だ。サビでベースが入ってくると、ぜんぜん変わってくる。この考え方はいろいの応用できると思うよ。

























GIMMIE SHELTER

Music by Mick

のちに数々の人に取り上げられたナンバーで、ロックのスタンダード的な存在の曲だ。この曲のメインはなんといってもギターである。イントロから出てくるギターIIは異様なサウンドだ。なんとアンプのトレモロをかけているのだ。リバーブもアンプに付いているやつ。現在ではアンプにトレモロの付いている機種はあまりないので、代用の方法を教えよう。コーラスのデプスを深めにとり、スピードをアップすると似た感じになるよ。リバーブは安価でデジタル・リバーブが手にはいるから、これを使用しよう。あとは自分の耳で近い音を探ってみよう。このイントロはぜひともうまく表現してもらいたい。次にギターIだが、これも面白い。ほとんどオブリガートに徹しているのだが、②からはエンディングまで弾きまくっている。といっても、音の選び方はかなりのワンパターン。音の幅も1オクターブ内外におさまっていて、ハイ・

ノートで盛り上がるという感じもない。だからここではニュアンスをうまくくみ取ってもらいたい。チョーキングや休符をうまく使って独特のねばっこさを生っている。決して目立たないけど、ボーカルのバックで装いフレーズを弾いている。とくにチョーキングは大事にやってほしいね。亘からの女性ボーカルは、メリー・クレイトンが登場している。音が高いので男性はファルセットで出すしかないね。巨からはハーモニーもあるので、このパートはぜひ取り入れてほしい。ドラムス、ベースはシンプルなノリを出している。△の4小節前まではベースはonC*のペダル・ベースとなっていて、△の4小節前ではじめてC*→B→Aと下がるラインを弾いている。ドラムは△の前1小節のフィル・インが肝。このパターンがあと数ヶ所はいるが、力を込めるあまりはしらないように注意。

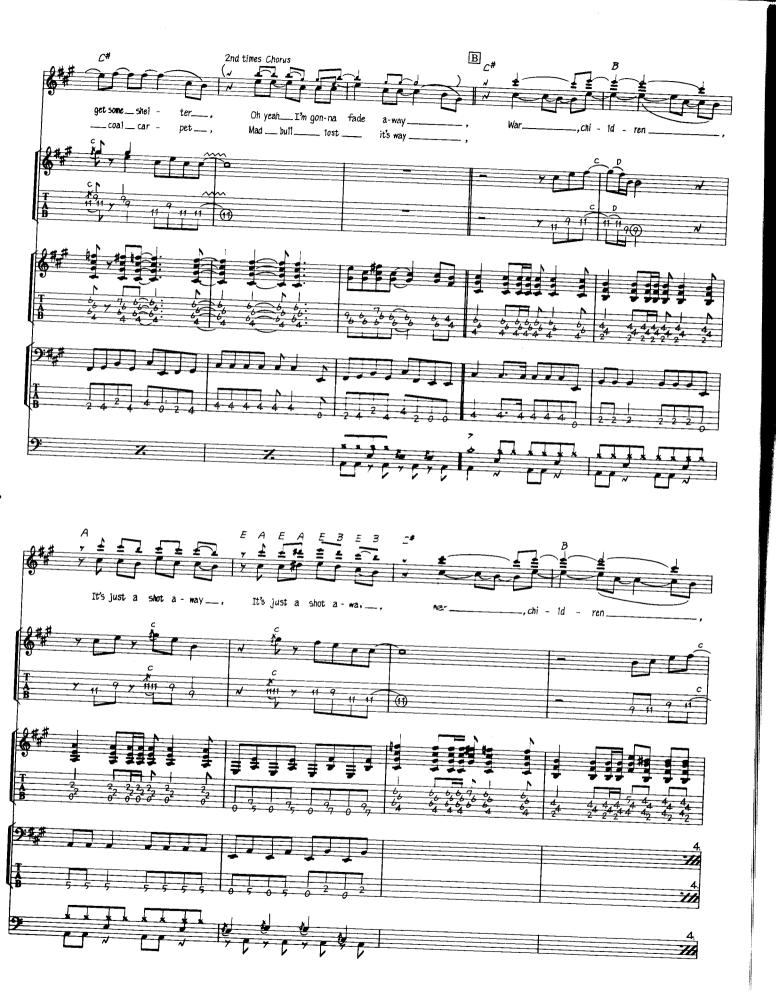






C#



























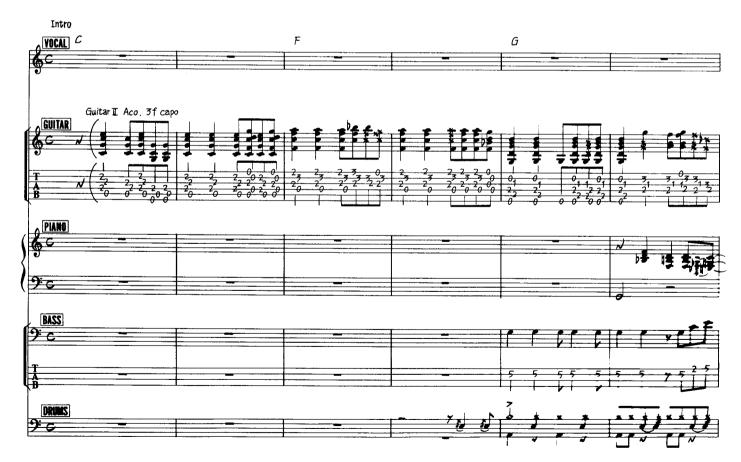


LET IT BLEED

当時('69年) はまだそんな言葉は一般的でなかったと思うが、今で言う「レイド・バック・スタイル」という表現がピッタリの曲だ。意識的にダルなリズムを刻むドラムスとアコースティック・ギター、それに輪をかけたようにレイジーに唄うミックのヴォーカル、そしてトドメはミック・テイラーのスライド・ギターにより、ともかくノンビリとしたムードに仕上がっている。もちろんこの雰囲気は非常に大切なのだが、これをコピーしてプレイする場合、あまりそれを意識しない方がいいだろう。ヘタをするととんでもないダラケた演奏になってしまう恐れがある。

で、**譜面では一部**しかフォローできなかったアコースティック・ギターだが、これはカポタストを3フレットにはめて、Aメジャー・キーで弾く。やたらとハデなストロークにしないで、タッチの変化をうまくつけてプレイしよう。一方エレキ・ギターの方

はスライド・プレイ用の変則チューニングと思われ、タブ譜のポジションもそのチューニングによるものを示しているので注意してほしい。1弦から順にE・C・G・E・C・Eというオーブン "C" チューニングに合わせよう。当然スライド・プレイにはある程度の慣れが必要だが、音程等あまり神経質になり過ぎるのも考えもの。まずやってみることが大切なのだ。また、バッキング・サウンドの中心はピアノで、リラックスした中にもアクセントのはつきりした弾き方にして、くれぐれもテンポが遅くなり過ぎないように弾こう。これはベースとドラムスも同様で、決してシマリのないサウンドやリズムになってしまってはいけない。また、ベースはそれなりにラインを作ったプレイなので、あまりこれを崩してしまうのは得策ではないだろう。























EC THE CONTRACTOR OF THE CONTR















SYMPATHY FOR THE DEVIL

hise by Mick Jagyer & Neith Richard

この曲のオリジナル・ヴァージョン(アルバム『ベガーズ・バンケット』)は、全編ピアノによるバッキングで、キーもEbと難しが、ここではギター主体のアグレッシヴな演奏が聴ける。キーコ・リチャードとミック・ティラー、この2人のスタイルの違いを大いに参考になるだろう。特に、後半にあるミック・ティラーコギター・ソロは、ロック・ギターの名演奏の1つにあげられるまど素晴らしいものだ。キース・リチャードも、この曲ではノーコンなチューニングで弾いている。イントロや歌のバックでは、ミック・ティラーはロー・コードでシンプルなバッキングを行い、ニースはハンマリングを使った2音のパターンを弾いている。両

者とも、ハンバッキング・ピックアップをつけたギターを使っており、ナチュラルなディストーションのきいたサウンドでプレイしている。時々フィード・バック音も効果的に使っており、このサウンドを再現するために、オーバー・ドライヴなどのアタッチメントを使ってみてもよいだろう。この曲のベースとドラムのポイントは、やはりノリだ。ドラムのスネアやバスドラのバターンは、ほとんど同じものを叩き続けている。安定したビートをキープすると同時に、ベースとともにドライヴ感のある演奏を心がけたい。



© Copyright 1968 by ABKCO MUSIC, INC. Assigned to Westminster Music Ltd. for the World excluding U.S.A. and Canada Rights for Japan controlled by TRO Essex Japan Ltd.





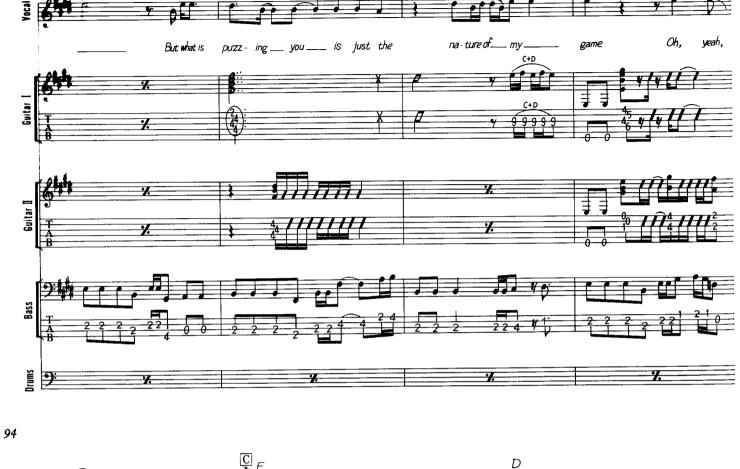












В























































BROWN SUGAR

ブラウン・シュガー

Words & Music by Mick Jagger & Keith Richard

田象的なギター・リフから始まる曲。ただし他の曲と異なる点は、このフレーズがボーカルとからまないことだ。いつもは、フレーズのトップの音がボーカルをなぞっていることが多いのに。つまりこの曲は、作曲のアプローチの仕方が違っていることを意味している。純粋にイントロというものを考えた結果が、このリフなんじゃないかと思う。まず最初の8小節、これはいつものパターンで割と簡単。問題は次の9~16小節だ。キースにしては、珍しくポジションが動くリフになっている。キーCで、Eb、Abコードの登場となると、それだけでストーンズにしては考えたな、まじめに取りくんだな、などと推測してしまう。それと、この部分はポジションが低く、運指もちょっと変わっているので、とくにイントロの11、15小節目は要注意。やはりこの譜面通り2本のギターで同じリフを演奏しなければ、この厚みは出ないので、イ

ントロのリフが肝心。ドラムスはバス・ドラムのパターンをみると、8ビート・ロックンロールのニュアンスだが、もうちょつと 泥臭いものとなっている。例えば回の2カッコ、あるいは亘を見てほしい。ハイハットの8分をきざまないで、バス・タムできざんでいる。これはかなり特長が濃く出てしまうので、このパターンを使うには勇気がいるのだが、ここではバッチリ。主人の臭いがしてきそうな感じだ。ドラムスをサポートするのがベース。この曲では8分フレーズに徹しているが、これが落ち着きを出す結果を生んでいる。とくにイントロの3、5、7小節のコード Cにおいてのベース音 Gは有効に聴こえるね。「ブラウン・シュガー」が収められているアルバム『スティッキー・フィンガーズ』にはギター・プレイが素晴らしい曲がたくさん入っているので、ぜひ聴きこんでほしい。











II2

















TUMBLING DICE

少イス本ごろが担

Mores & Music by Mick Jagger & Ketth Richard

この曲もギターはオープンGチューニングで、4フレットにカポタストをつけて演奏している。2本のギターは、ともにエフェクターなどつけず、アンプに直接プラグ・インしているナチュラルなものだ。少しディストーションしているが、アタッチメントは使わずに、アンプで自然にディストーションさせた方が良いだろう。Guitar IIは、スライド奏法を行っている。これは、左手の小指などにスライド・バーをつけてプレイしているものだ。凹のギター・ソロの部分では、スライド・バーを使わず、指でフレットを押え、チョーキングを行っている部分もあるが、スライド・

バーはつけたままにしておき、他の指を使ってうまくフレットを押えるようにしよう。この曲では、ピアノも弾かれているが、スペースがないので省略させてもらった。これは、シンブルにコードを8分音符で刻んでいるものであり、問題なくプレイできるだろう。この曲のベース、ドラムは、ほとんどオーソドックスな8ビートのパターンを弾いている。テンポも演奏しやすいミディアムだ。リズムがはしらないように注意して、ノリの良い演奏を心がけたい。



© Copyright 1972 by PROMOPUB B.V. Assigned to Westminster Music Ltd. for UK & Eire, France, Germany, Italy, Scandinavia, Japan, Spain and Brazil Rights for Japan controlled by TRO Essex Japan Ltd.







I 2 I







......













Mick Jagger & Keith Richard

一連のストーンズのナンバーとは、ちょっと雰囲気が違うようだが、名曲として、いつまでも残る曲の1つといえそうだ。曲調はスロー・テンポのバラードだ。この曲で使われているギターは、アコースティック・ギターだけで、チューニングはノーマルなものだ。譜面は、1本のギターしか載せられなかったが、途中からもう1本別のギターもコード・ストロークを行っている。これもやはりアコースティック・ギターで、シンプルに8ビートのストロークを行っているものだ。この曲では、キーボードとして、ピアノも活躍している。これは単純にコードを弾いているものでは

なく、メロディアスなプレイだ。繰り返しや、ダル・セーニョの後の部分では、譜面のフレーズを発展させて、アドリブでプレーしてもよいだろう。この他この曲では、ストリングスも入れられている。これはメロトロンという楽器を使ったものと思われるだシンセなどでプレイすれば問題ないだろう。この曲のドラムは、全体的に静かにプレイしているが、時々ハイハットをオープンさせてアクセントを入れているのが印象的だ。このハイハットは、タイミングよくペダリングを行い、鋭いプレイをしたい。

















13)

LET'S SPEND THE NIGHT TOGETHER

友をぶっとばせ

& Music by Mick Jagger & Keith Riche

この曲が出た当時は、英米では放送禁止となっていたが、我が国では、「夜をぶっとばせ」という明るい邦題で、ガンガンラジオから流れていた。この譜面は「スティル・ライフ』というアルバムからの採用で、ライブ・バージョンとなっている。それだけに実際の演奏に際しては、極めて現実的なコピー譜となっている。スペーンズのストレートなロックンロール・フィーリングが言っぷりと出ているからね。この曲のメインはやはりギターである。まずギターIをみてみると、イントロはサビのメロディこう宴の「一七二一を付け、ロックンロール・スタイルに導、て、る。」 こ入って3、4、7、8小節目もそれに準じたコード・エッティングになっている。ギターIIはどうであるかというと、こちらまもつとすき間をとり入れたフリーキーなバッキングをして、るが、

ギターIで補えなかった回の9~16小節のボーカルのメロディをうまくサポートしている。このように自由にプレイしているようでも、ツボはちゃんと押さえているところガニクイね。2本のギターのバッキングの存在感が高いから、ボーカルが終わったらギター・ソロ、なんていう展開はまったく必要なくなってしまうわけ。これほど特長のあるサウンドをバンドで出せるよう、さっそくトライしてみよう。ドラムスは、ライブということで、決まったパターンにとらわれず、自由に叩いているので、もうちょっと曲の構成ごとに整理してもいいだろう。エンディングはストーンズならではのもの。このエンディングでにっこり終わるにはまだまだ修業が足らないだろうね。スタジオ録音より軽快さでは劣るものの、カの入ったプレイをここから感じとってほしい。









































TIME IS ON MY SIDE

ライブ・アルバム『スティル・ライフ』からだが、これは素晴らしい出来。もう涙なくしては聴けないね。この曲は注目すべき点がいろいろあるので、頭の方から順を追ってみよう。まずイントロのアルペジオ。これもほとんどソロに近いだけに難しい。とくに3連のリズムだからね。最近ギター・ソロは弾けてもアルペジオはできないなどという本末転倒な人がいるから、この機会に正確にピッキングし、正確なリズムを出せるよう練習するといい。イントロのギターIIはこれはもうフィーリングの世界というしかない。自然にプレイできるまで繰り返そう。「四の歌い出しの"Time"というところのフェイクは、この曲に対するミックの思い入れがよく表われているところ。敬意を表して、コピーしよう。そう、ミックになりきつてね。「Aの5、6小節のギターIのフィ

ル・インは、ブルース・フィーリング満載のフレーズ。とくにスライド、チョーキングなどの技は、大事に取り入れよう。⑥からのギターIのソロはもう圧巻。1~5小節の間のとり方はもうこれ以上考えられないというもの。後半3小節のたたみかけるようなフレーズも、盛り上げるね。そして最後の小節のリズムのキメを経て、囚にダル・セーニョ。ここでスッとボリュームを下げるあたりは、やはり年季としかいえないだろう。コーダのリピートも、サラッと流して3カッコの3拍、4拍目でリズム・セクションをつけ、エンディングとしている。これはカッコいいね。最後のコードは突然Fメジャーフth。これもGOOD/ストーンズにしては、バッチリきまった(?)エンディング。やはりこういうバラードはライブの方が数倍いいね。



© 1963 by RITTENHOUSE MUSIC, INC. and RAGMAR MUSIC CORP.

Assigned 1964 to Westminster Music Ltd. for the World excluding U.S.A. and Canada Rights for Japan controlled by TRO Essex Japan Ltd.













G

Dт

 \mathcal{L}

15

HARLEM SHUFFLE

Earl Nelson & Bah

不思議な雰囲気のイントロからこの曲は始まっている。ここは、フリー・テンポになっているので、イン・テンポになる3小節目のタイミングに注意してブレイしよう。この曲では、3本以上のギターが重ねて録音されているが、譜面の都合上省略した音もある。これらのギターは非常にラフで、バラバラに弾いているようだが、全体として、ひとつのノリを出しており、これがストーンズ・サウンドの1つの特徴だ。とにかく、ノリを大事にして演奏してもらいたい。ノーマルなペースのチューニングでは演奏不可能なD*の音が弾かれている部分がある。これは、譜面のように4弦をD*に下げてチューニングすれば解決するだろう。タブ譜は、このチューニングによるものを記しておいた。又、ベースのすべての弦を半音下げてチューニングしてもよい。どちらでも、各自弾きやすい方法を撰んでもらいたい。この曲では、キーボードと

して、エレピとオルガンの音が入っている。両方ともに単純なパターンの演奏だが、全体のノリをくずさない様に気をつけたい。この曲は、Gfm、A、Am、Bbといったキーが入りみだれており、転調の部分がたくさんある。そのつどに、キメのフレーズをギターが弾いているのだが、それ以外の部分では、リズム・カッティングと、オブリガートのフレーズを延々と弾いている。譜面通り、正確に弾いてもよいが、フレーズの感じをつかんだら、譜面にとらわれず、自由に弾いてみるとよいだろう。この曲でのオブリガートは、すべてペンタトニック・スケールによる演奏だ。このスケールの使い方を、ぜひマスターしてもらいたい。なお、エンディングのフェイド・アウト部分では、サンブリング・シンセを使ったと思われる、オーケストラ風のフレーズが少し聴かれるが、譜面では省略させてもらった。



©1963 by BUG MUSIC/MARC-JEAN MUSIC













